

先日、散歩に出かけ、子どもたちは、通称「看板」という木でクワガタを見つけました。これは、まさに夏の到来、風物詩を意味しています。梅雨の季節なのに、それを飛び越えて夏が来てしまったような思いになりました。じめじめした湿気を感じることなく、さわやかな雑木林や里山の空気に触れる毎日ですが、畑や果樹園からは水不足の悲鳴が聞こえてくるようです。自然の流れに敏感になりながらの暮らしになりそうです。

今は、まさに緑濃い木の葉がうっそうと繁る季節。子どもたちの木登りの木も変わっていきます。太くなりすぎて、登れなくなってしまった木。成長して、木登りできるようになった木。葉が繁っているだけに、子どもたちの木登りの声か、思いがけない木から聞こえてきて、びっくりします。それだけ、大地のスロープの雑木は、どんどん大きくなってきているのでしょうか。

OBが来て、何だかスロープが小さくなっているような気がする と皆口々に言いますが、自分たちの身体が大きくなってきたのと、雑木が繁ってきているのと、両方なのでしょう。

自然の成長と人間のそれとが、とても魅力的に不思議に感じる瞬間です。この躍動感あふれる季節を、自然の恵みである雨を時には祈りながら、過ごしていきたいと思います。



【タイミングⅡ】

久しぶりに、末っ子の中3の息子の登場です。思春期真っ盛りで、「あー」「うん」としか言わない、寡黙な毎日。でも、学校や野球では、友だちとにぎやかにやっている。その野球では、最後のシーズンを迎え、何と、春の選抜に続き、春の大会・夏の大会と、3大会の全国出場を決めた。そして、来週は決勝で勝てば、憧れの「ジャイアンツカップ」に出場という金字塔をたてるらしい。が、しかし、親ははらはらしている。それは、春の選抜までレギュラーだったのが、春からは、控えに回り、ベンチ暮らしになっていることである。しかも、レギュラーポジションは、下級生にとられている。そして、その子たちは、結果を出しているのだから、なかなか出場機会に恵まれない。強豪チームだけに、小学生時代から活躍している子どもがほとんどで、それだけに層が厚く、打てないとすぐに代えられる現状だけに、実力社会である。

それは、応援する側にも微妙な動きと心理が見られる。野球だけに限られず、集団スポーツは、団体行動、チームが優先だけに、レギュラーも控えも2軍も応援組も、保護者は同じ応援や仕事をこなさなければならない。高校野球でも3年間ベンチ入りできない子どもの親でも、応援席でレギュラー組の保護者と一緒にチームを応援しなければならない。自分の子どもが試合に出ていなくてもである。これは、すごいことだと思う。私には、とてもつらく、できないことだと思ひ、それをして人たちは、尊敬に値することだと思っていた。それが今は現実に、自分にかぶさってきた。

応援席にいと、母親たちと父親たちにも微妙な動きの変化があり、妻とそれを話し合ってみた。父親たちは、プライドというものがあり、(それぞれの子どもは、小学生時代から各地でそれぞれ大活躍していた子どもだけに)、特に3年生の父親たちはバラバラに応援しており、(3年生20人のうちレギュラーは7人、残り3人は2年生) 2年生や1年生の父親たちとは、一緒に応援していない光景がある。その点、母親たちは、一体となり応援している。ここに、父親たちの微妙なプライドが覗いているのだろうか。

スポーツをやっていた長男も次男は、小さい頃は目立たなかったが、中学からは努力して日の当たる場面において、親もいい思いをさせてもらってきた。末っ子は、逆のパターンで、小さい頃から活躍してきたが、ここに来て、厳しい局面を迎えているし、親も、つらい思いに陥りかけてきていたが・・・・

「努力に勝る天才なし」この言葉は、末っ子が4年生の時から唱えてきた言葉で、小学校の卒業式の会場で、子どもに直接かけた言葉でもある。小4から、毎朝6キロを走り、中1から、その距離を新聞配達で走り、配達終了後、小学校のグラウンドや大地で野球の練習を続けている。その間、中学校入学前に肘を壊し、再起不能の可能性もあったが、足の骨の一部を移植して1年間のリハビリを終えて、奇跡的に回復して、野球ができるようになった。それらは、家族はもちろん、兄弟姉妹も一目を置いていることである。この努力は、家族の誇りともなっている。この努力は、必ず実るし、それが、今でなくても、高校でも大学でも社会であるかもしれない。

本人は、この局面でも不平や不満は一切言わず、以前と同じように練習をしている。(イライラしているのはわかるが)悔しいことは手に取るようにわかる。でも、ここで、子どもと共に親が寄り添い過ぎて、一緒に受け入れすぎると、子どもがみじめになることだろう。親が子どもの不平や不満や愚痴などに一体となりすぎると、子どもは前に進めなくなるであろう。

親としてできること、少しでも打撃練習できる回数が増えるようにと、妻も一緒に玉ひろいに出かけることにした。朝6時、小学校のグラウンドで準備している所へ、末っ子が走ってやってくる。マシンを使って投げ、妻は、広いグラウンドを左右へ走り玉を拾う。長男がしばらく居たので、長男も一緒に練習に参加した。この練習の成果は、まだまだ試合出場には結びつかないが、この練習は、家族の至福の時間である。家族で、朝から誰もいない静かな世界で、小さい頃のように、キャーキャーとボールを追いまわし、思春期の末っ子や長男と一緒に楽しめる幸せ。何よりも勝る幸せである。私たちは、今の局面は、人生のうちでとても小さいちっぽけなことだと再認識した。この局面は、私たち家族にとって、素敵なプレゼントかもしれない。こんな素敵な時間と世界を与えてくれたのだから。(子どもには言えないが)

この最中、末っ子は、誕生日を迎えた。恒例の如く、家族兄弟からメッセージが届けられ、それを色紙にまとめた。長女は「自分がいいと思った道を信じてその場で一生懸命努力すればその場がゆうなにとって最高の場所になる。お姉ちゃんは一たんが大好きよ」次男は「調子がよくないらしいけれど・・・・そんなことで絶対挫けるなよ。それでも挫けないで努力すれば絶対に結果がついてくるから」と遠くからメッセージをくれた。長男は、朝一緒に起きて練習し、布団を並べて眠り、一緒に外食に出かけたり、ランニングをしたり、風呂に入ったり、練習に送って行ったりしてくれていた。これらは、素晴らしいタイミングの連続であった。

子どもが、変わらずに努力しているのだから、親もそれを誇りに思い、そして、その努力を応援しよう。結果を支持、応援、自慢するのではなく、その姿勢を応援しよう。レギュラー組も、控え組との練習があればこそ、チームがあればこそ試合ができるのだから、それぞれが誇りを持って応援していこうと実感した。

よって、私の応援席での位置は、相変わらず1年生や2年生と一緒にである。自分の子どもは、試合のダイヤモンド上では見ることができないが、朝の新聞配達で走っている光景・朝練習している姿がダイヤモンド上に見える。